「子どもを中心に据えた“つなぎ役”として」
－通級指導教室と通常学級との連携－

加古川市立平岡小学校
教諭　　國本　美幸

１　取組の内容・方法

本校には、さまざまな発達上の課題を持つ児童が在籍している。それに加えて、愛着に課題を持つ児童も多く在籍しているため、支援は複雑で一筋縄ではいかない事が多い。時に支援する側も傷つき心が折れそうになることもある。多種多様な課題を持つ子ども達へのかかわりは難しく成果も見えにくいが、ＳＯＳのサインを出す彼らを支援するため、通級指導教室担当として、また特別支援教育コーディネーターとしての取組をここにまとめる。

（１）校内でのサポート

①通級指導教室での指導

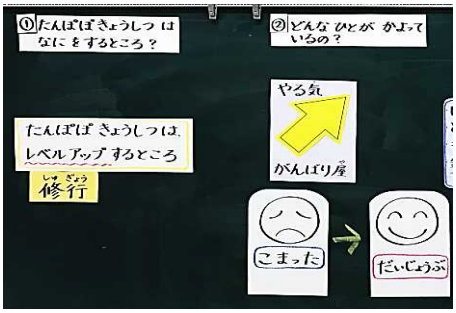
通級指導教室に通う児童や保護者に、最初に必ず伝えることがある。それは、「入った瞬間から、“さようなら”をめざして指導を行う」ということである。通級に通う子ども達は、これまでの失敗体験や叱られ体験から自信を失っている子が多い。字義どおりに受けとめてしまう子、大人が「これくらいわかるだろう」と思う事がわからない子、相手の言葉尻や語調に過剰に反応してしまう子、緊張が高く日々不安を持ちながら生活する子など、様々な課題を持つ子が学習している。通級という個別の場で、自らの言動や考え方のクセ、得意や苦手をじっくりと見つめる機会を作り、自分に合ったやり方を見つけて少しずつ苦手を克服していく。どの子に対しても、自分の苦手と得意を知り、等身大の自分を好きになれるよう支援している。また、少数派の個性は尊重されるべきだが、社会で生きるうえで多数派から学ぶことは多く、世の中のルールを知っておくことが大切だとも伝えている。

子どもの「今」の状態だけでなく、その背景にある「これまで」の体験が関係しているかもしれないことを念頭に置き、一つ一つ丁寧に紐解いていく作業を大切にしている。その際、保護者から得る生育歴や過去の担任の情報は重要である。通級での指導内容を担任と保護者に毎回伝え、子どもを中心に学級担任・保護者・通級担当が連携しながら育てていけるよう、その子の些細な言動もできるだけ共有しながら支援にあたっている。

②通級指導教室啓発授業

毎年学年初めに全学級を回り、通級指導教室についての理解促進のための啓発授業を行っている。これは、すべての児童が通級指導教室について正しく理解しなければ、通級に通う児童だけでなく、この先通級に通うかもしれない児童が安心し、自信を持って学習することはできないと考えたためである。と同時に、通級に限らずすべての児童が、学び方には多様性があるということや、互いの個性を尊重することの大切さを知り、様々な特性を持つ児童が自分に合った学び方で成長する場が学校なのであるということを理解させておくことが重要だと感じたからである。

写真１　啓発授業「通級教室ってなあに？」



授業内容としては、通級教室の基本的な知識（「２階にあるよ」「他の学校からも来ているよ」「修行（練習）をするところだよ」）の説明に加え、感覚過敏やＳＳＴなど、毎年異なるテーマも取り上げ、違いを認め合うことの大切さを伝えている。

毎年欠かさず伝えているのは、通級教室とは、生きていく中で自分一人では解決できない困りごとを解決するために、通級担当と一緒に修行する場であることや、ダメな子だから行かされるのでなく、自分の得意と苦手を知って、できることを増やしていく「成長の場」であるということである。また、通級児童は、皆と同じになるためでなく、自分らしくなるために学びにやって来るのだということも必ず伝えている。

③校内支援体制の検討・確認

年度初めに校内研修会を持ち、支援の必要な子ども達について、特性や効果的な関わり方を全職員で具体的に学んでいる。

また、特別支援教育推進委員会で、対象児童への具体的な関わり方（教室にいられなくなった時どこで何分くらいクールダウンするか、廊下でその子を見かけた時どうするか等）や、教師の役割分担（暴力への対応役、苦手な授業時の見守り役、本人や周囲への通訳係等）を確認し、全職員が対象児童への対応方法を把握する。

（２）校外でのサポート

本校のみならず、他校からの相談を受けることも増えた。そのため、他校や他機関から講話や発表の要請があれば喜んでお引き受けし、子ども達の支援に役立ててもらえるよう具体的な取組を中心に紹介した。

通級指導教室で児童がどんな学習をしているのか、写真などを添えて具体的に説明したり、学級でできそうな支援の具体例を紹介したりした。また、以下のように自分が日々支援するなかで大切にしていることを伝えた。

- 教師自身が「私がこの子を変えてみせる」と頑張り過ぎない。
- 支援の効果を急ぎ過ぎない。
- 子どもの行動には必ず理由があるため、「なぜだろう」と行動の奥を探ってみる。
- 子どもの「好き」や「得意」をうまく使うことで支援がしやすくなる。
- うまくいっている時の事実も記録しておくことが今後の支援のヒントになる。
- 子どもに対してその場しのぎのごまかしはせず、真摯に向き合う。
- 思いは受けとめるが、間違った行動は受容しない。「ＮＯ」をきちんと伝える。
- 「これがわかるのだから、このことくらいもわかっているだろう」という考えを捨てて、「知っているとは思うけれど」と言いながら丁寧に話す。
- あたたかさが子どもの安心につながることを知って接する。
- 職員間のつぶやきが大切な情報共有となり、チームでの支援につながる。

２　取組の成果

（１）校内の通級啓発授業を毎年継続して行ったことで、通級指導教室が苦手をトレーニ

ングする学びの場所であるという認識が、ほぼすべての児童に浸透した。自分のクラスや学年にいる通級児童に対して、学ぶ場所は違うけれど自分たちと同じように頑張っているのだという意識が高まってきた。他校通級生に挨拶をする児童の姿も見られるようになった。

通級児童も、自分のことを友達に正しく理解してもらえたことが好機となり、以前にも増して生き生きとやる気を持って学習に取り組んでいる。同時に、自分のことをもっとよく知ろうと、日々の言動を真摯に振り返ったり、苦手なことから逃げずに努力を続けたりしながら自信をつけている。

学級担任も児童とともに啓発授業を聞くことで、通級指導教室のことを正確に理解し、通級児童に対しての学級での関わり方や、周囲の児童や保護者にどのように伝えればよいかが明確になったようである。そのため、通級担当・保護者・担任間での連携がさらにとりやすくなった。

特別支援教育推進委員会で児童の具体的な支援体制を共有することで、担任が一人で抱え込まずに複数で対応することができ、支援がうまくつながるケースが増えている。

（２）他校の校内研修後には、「学級指導のヒントとして活用している」、「子どもを見る時の視点が増えた」、「〇年生だからこれぐらいできないとダメだという考えを見直した」などという感想をいただいた。

また、研修をきっかけに教育相談の依頼が増え、困っている子どもや教師のために、ともに解決策を考える機会が増えている。

３　課題及び今後の取組の方向

現在も悩みながらの毎日である。しかし、子どもが変わり成長するには時間がかかることを肝に銘じ、求め過ぎず、諦め過ぎずに目の前の子ども達と向き合っている。

通級児童の持つ具体的な苦手さを周囲の子どもが十分に理解するには、一度の説明では足りないと感じる。折に触れ何度もクラスを訪問し、その都度子ども達に問いかけ、また質問に答えることでこそ理解が深まると実感している。限られた学習時間の中で、いかに児童理解のために時間を割いていくか、誰がどのタイミングで通級児童と周囲の子ども達との橋渡しを行うかが課題として残る。そのためには、学級担任との更なる連携が欠かせない。担任には、周りからは見つけにくい困りごとを抱えながら頑張っている子どもに気付く「アンテナ」に磨きをかけてもらいたい。そのため、校内研修の改善が必要である。また、担任を独りにせず、子どもや保護者を孤独にさせないための支援体制づくりにも更なる工夫が要る。通級児童も周囲の子ども達も生き生きと生活できるよう、子ども支援・担任支援を継続したい。

子ども達が自分を信じ胸を張って集団の中で生活していけるよう、担任と子ども、子どもと子ども、保護者と子ども、担任と保護者、そして教師と教師をつなぐ「つなぎ役」として今後もサポートを続けていきたい。